

ゆききのみち

日本古神
道研究会

皇紀二六六三年 三月 三日 直会より

『みちについて』

沢山の みちの意味

宇佐美様 本日の大祭の趣旨と違うのかも知れないのですが、今日、大祓祝詞を奏上して頂いている時に、急に「道」と

いう字が見え、続けて感じさせて頂いたのが、仏教にしてもキリスト教にしても、ユダヤ教・ヒンズー教にしても、そういったものはすべて「教」えとなつている。すべて「教」えと書いてあるのだなど。

それが日本の場合は、神道は勿論ですが、神道に限らず「道」になつていて、武道である剣道とか柔道、その他にも茶道とか華道等、色々があると思うのですが、全てを「道」に昇華させていっているのだなあという感じが、そして、その根幹のところ「神道」があるのかなという感じを強く受けさせて頂きました。

そして、「道」ということには、「ゆききのみち」の命名の由来（※参照）でもご解説頂いた「御霊」の方で書いて頂いている「みち」ということで、「神様の世界と行き来する」ということまでも含んで頂いているというような感じを受けさせて頂きました。

球体の中

の「みち」へ

師 要するに本体である御霊は、水晶の玉みたいに綺麗な球体ですから、どこから入っても良いんですよ。剣道から入ろうと、柔道から入ろうと、或いは武道からでなくても、華道とか茶道とか、自分がその道を極めようという時に、どこから入っても良いのです。すると道路としての道を歩いているようであるけれども、そこから辿り着く所というのは「御霊」と書く「みち」なのです。

球体として存在しているわけですから、それはお華（華道）から入ろうと、武道から入ろうと、要するに人生そのものがそういうものを求めていくということに繋がっていけば良いのです。

※この小誌を『ゆききのみち』と命名した由来

『ゆききのみち 第一号』より

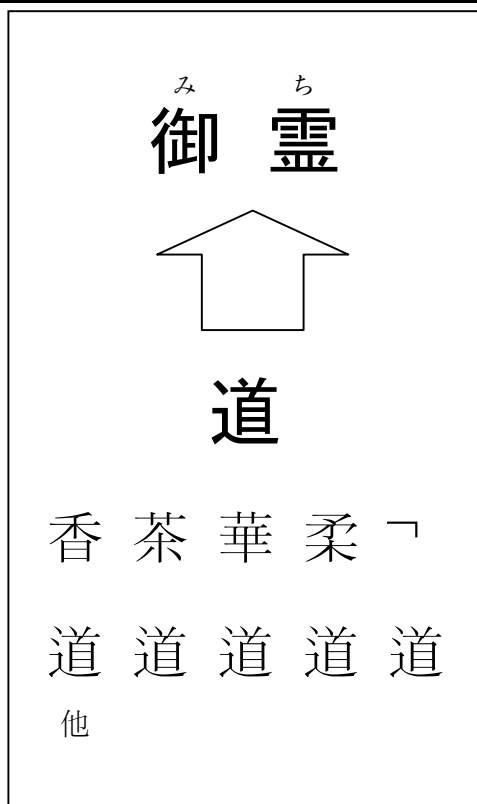
次のようなたくさんの意味を含んでおります。

- ① 一昨年（平成三年）、石舞台において、高天原と地球との間を結ぶ『往來の道』を聞かせて頂いたこと
- ② 大神様とご神縁を求められる方々に、大神様の御霊とその方々の御霊を結ぶ『往來の道』
- ③ 「ゆ」とは「湯」をも表し、湯は「火と水」の接点ですから、お風呂は神様の懐の中ということになります。
- ④ そこで、「ゆ」||「湯」||「火水」||「かみ」ということで、神の声を聞きとの意味||「ゆきき」をも表します。
- ⑤ 最も意味したことは、これから皆さんと大神様との御霊が通い合い、行き来されることを念願したことです。

それは何故かと言うと、この世に人として生まれてくること自体が、「御霊磨きの為」に生まれてくるわけですから。

だから究極の目的は何かと言うと、「御霊磨きの為に人の世に生まれてくる」のだということです。だから自分自身をどれだけ磨き、鍛えるかという事が大事なのです。その御霊をどれだけ磨き切るかによって、今度は人の世が終わった時に何処へ行くかが決まるわけです。

だから神界に還れるまでに磨き切っておれば、人は本来神の子なのです。当然親元である神の世界に戻れるし、仏界までの磨きであれば仏の世界に還ることが出来るし、磨き方如何によっては丹波さんの大好きな大霊界へ還る人もあれば、幽界に還る人もいるということです。



「幽霊」というと人の世界から見た時には怖いようだけれども、幽界・霊界のことを合わせれば幽霊になる訳で、そこから下になると化け物の方で、幽霊と化け物とは違うのです。

自分の本体を磨く為

要するに今は「人は何の為に生まれてきたか」ということ自体が判らないのです。それで「自由だ」の「平等だ」の「権利だ」という事を教わるものだから、自分勝手に放題になっているのです。言いたい放題の事を言い、したい放題の事をすれば良いのだと誤解してしまっているのです。そこが違うのです。一番大事なことは「人は何の為にこの世に生まれてきたのか」です。そしてそれは「御霊磨きの為」なのです。

そういった意味でも日本人はこうした事に一番適しているのです。昔からの「惟神の道みことのみち」であるとか、それぞれの道が一杯あるわけです。臨済宗の栄西禅師が中国からお茶を持ち帰って「喫茶養生記」を書かれたけれども、お茶は単に「栄養があつて身体に良いよ」というだけではなくて、どんどんどんどんそれを道にまで極めていくわけでしょう。千利休という方が茶道として高め、今でも表千家、裏千家として連綿と続いている。そういうふうな道を極めて行くのです。

伝統を更に進化させる

歩き方一つにしても、或いはお辞儀の仕方一つであっても小笠原流というものがあった筈です。あれは和室の時には、完全にそれに従つてするようになっていたのですが、洋室に変わった途端に皆やらなくなつたのです。小笠原流の宗家の方

が、洋室の時にはこうだよということをいち早く確立すればよかったのですけれどもね。

ところが、そういう方というのはどちらかというと保守的なので、和室についての礼儀作法に固執するものだから、洋室における礼儀作法を学びに外国へ行くという機会を逃してしまうのですね。そして、伊藤博文とかいわゆる政府から派遣されて全権大使で行ったような人達が帰国して、「外国での作法はこうだよ」と先に伝えられると、出る幕がなくなってしまうのです。

そういう時に小笠原流の宗家の方が、外国へ行つてそういうマナーを学んできて、それを取り入れてキチツと伝えると、小笠原流というのは和室に関する純和風のもの、新しい洋風のものとの両方を支配することが出来ただろうと思うのです。そういうところで時代が段々と変わって行ってしまうのです。残念ながら、小笠原流は今は全体としてはあまり受け入れられていないけれども、洋風と両方をしていけば、今でも受け入れられたと思います。

だけど、小笠原流に則つて茶道とか華道が出来ている筈ですよ。小笠原流で行うと敷居とか障子とか、畳のへりでこうするとか、立居振舞いについてどうするというのがあるのですから、そういう礼儀作法を知った上で、今度お華に立ち向かった時にどうするのか、お茶に立ち向かった時にどうするのかという、やはりそこまで歩いて行くには、小笠原流で正しい形で歩いていくことが前提にならなければおかしいわけですから、お茶にしてもお華にしても、その場に着くまでは小笠原流が必要な筈ですね。

【喫茶養生記】

茶に関するわが国最初の書。養生の仙薬としての茶の効能を説いたもの。將軍源実朝に献じたものという。栄西著。二巻。一二一年成、一二一四年修訂。

【お茶の伝来と茶道の成り立ちについて】

お茶は中国から伝わり、奈良時代に上層階級に喫茶の風習があったことがわかっています。その後、広く各地で栽培され、主に僧侶や上層階級に飲用されました。

鎌倉時代に栄西禅師をはじめ多くの禅僧が、製造法や喫茶法を伝え進歩しましたが、鎌倉時代までは、思索生活の伴侶として、また薬用として用いられました。東山時代になって、より精神的なものを求めるようになり、村田球光が禅的思想を織り込み、そして、千利休が「和敬静寂」を唱えて、宗教的に、道徳的に、芸術的に茶道にまで完成しました。

その後、江戸時代により盛んになり、多くの流派が生まれましたが、現代「茶道」と言われるものは、利休の「和敬静寂」を本旨とするもので、三百五十年に渡って日本の文化生活に重要な役割を占めています。

【和敬静寂】

「和」を普遍の根本原理とする。そして、亭主と客とが互いに「敬い合う」念こそが秘訣である。さらに、清らかな心をもって亭主は打ち水をし、客は手と口をすすぐ。「寂」はそうしたことを体験を通して行って自ら悟るといふ「道」の精神に立つことを表しています。

【小笠原流】